前

平成十八年度　入学試験問題

国語

一五〇点満点
≪配点は、学生募集要項に記載のとおり。≫

（注　意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は1ページから10ページまでの10ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページ（うち10ページは下書き用）ある。

三、問題は全部で3題ある。総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者は、3題のうちから任意の2題を選択すること。総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者で3題とも解答した答案は無効になる。

四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者は、選択しなかった問題の解答欄に斜線を引き、選択しなかったことを明らかにすること。

五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

私たちは、日常生活で「曖昧（あいまい）」という言葉をしばしば使う。そして、数学的言語に比べて、自然言語による思考は「曖昧」であるとしばしば非難される。この「曖昧さ」に対してどのような態度をとるかによって、世界をその中心で統べているものについて考える方法論は変わってくる。

自然科学者が、それ以外の分野の、自然言語に基づいた思考を非難する際の一つのパターンとして、「そのような議論は厳密ではないから、いくらやっても『お話』(1)であって意味がない」というものがある。

ニュートン力学から最近の超ひも理論に至る数学的形式に基づく自然科学の成果と対比すれば、自然言語に依拠する人文諸学における思考が、「曖昧」なものに見えてしまうのは、仕方がないことである。しかし、だからといって、自然言語による人文学的思考が、数学的形式に基づく自然科学の思考に比べて劣っていると考える必要はない。

というのも、「厳密性」(exactness)と「曖昧さ」(ambiguity)という一見自明な区別の背後には、そう簡単には片づけられないきわめて不思議な事情があるからである。

人間の意識や思考というものが、物質世界に対してどのような関係にあるのか明らかではなかった時代には、人間の思考を物質世界の厳密なる因果的進行と切り離して「ブラックボックス」に入れることができた。(2)そのブラックボックスの中では、すべてのことが可能であった。死者と交信することも、異界のヴィジョンを見ることも、この世界に存在しないものを仮想することもできた。

そのような、「何でもあり」のブラックボックスの中においては、人間の思考が「曖昧」でありうるのは当然であった。世界が因果的な視点からどれほど「厳密」にできていたとしても、思考はそれと切り離されたブラックボックスの中にあるのだから、それは曖昧になることもできたのである。

ところが、一方では思考の数理的基礎の解明が進み、また一方では脳科学や認知科学が発展してきたことによって、世界の

中の物質の数学的に厳密な因果的進行から遊離したブラックボックスの中に人間の思考を隔離しておくことが、次第に困難になっていった。

(3)「思考の自然化」とでも呼ぶべき事態の進行の下で、人間の思考はブラックボックスから出された。このような人間の思考の基礎に関する考え方の変化を前にして、思考の曖昧さは自明のことではなく、むしろ(4)一つの驚異であることをこそ見て取るべきである。脳内過程の厳密なる進行に支えられているにもかかわらず、人間の思考がいかにして「曖昧」たりうるのかということ自体が、大変な問題を提起しているのである。

そもそも、人間の思考作用において、「曖昧」ということは本当に可能なのか？　もし可能だとしたら、その思考における「曖昧さ」は、それを支える脳の厳密なる因果的進行と、どのように関係するのか？

世界を因果的に見れば、そこには曖昧なものは一つもない。その曖昧さのない自然のプロセスを通して生み出された私たちの思考もまた、この世界にある精緻さの顕れ(あらわ)でなければならないはずである。

それにもかかわらず、私たちは、確かに、曖昧な自然言語の用法があるように感じる。もし、自然言語が、厳密な因果的進行が支配する世界の中に「曖昧」な要素を持ち込むということを可能にしているのだとすれば、それ自体が一つの奇跡だというしかない。

この奇跡をもたらしている事情を突き詰めていけば、物質である脳にいかに私たちの心が宿るかという心脳問題に論理的に行き着くことはいうまでもない。

そもそも、自然言語という思考の道具の豊饒(ほうじょう)さの起源は、数学的形式と対置したときに「曖昧」と片づけられがちな、その表現世界の内包する自由の中にあるようにさえ思われる。数学的形式と同じような形で「厳密さ」を追求すれば、自然言語の内包している可能性はむしろ殺されてしまうのである。

自然言語による思考は、曖昧だからこそ力を持つ、などとまで主張するつもりはない。ただ、曖昧さは確かに存在し、言葉に時に疑いようもない力を与えることを確認するだけである。(5)その上であえていえば、自然言語における思考とは、曖昧さの

芸術なのである。

恐ろしいことに、その曖昧であるはずの自然言語は、精密な自然法則に伴う脳内プロセスによって生み出されている。この点にこそ、安易な思考停止をすることなく、徹底的に考え抜くべき問題が潜んでいるのである。

（茂木健一郎「「曖昧さ」の芸術」より。一部省略）

問一　傍線部(1)「『お話』とはどのような意味で言われているか、説明せよ。

問二　傍線部(2)について、なぜこのように言えるのか、理由を説明せよ。

問三　傍線部(3)「思考の自然化」とはどのような意味か、説明せよ。

問四　傍線部(4)「一つの驚異である」というのはなぜか、説明せよ。

問五　傍線部(5)にいう「自然言語における思考とは、曖昧さの芸術なのである」とはどのような意味か、説明せよ。

白

紙

二　次の文は、母と祖母の手に育てられた高見順が自分の少年時代を回想した自伝的小説の一節である。これを読んで後の問に答えよ。（五〇点）

大正八年四月、東京府立第一中学校に私は入学した。入学できたと言ふのが至当かもしれぬ。私は十三歳であつた。

私は神田の古本屋街の店を次々にのぞいて行つた。

「簡野道明、新編漢文読本の巻一、ありませんか」

私と同じやうな中学生の客の殺到にそなへて、多くの古本屋はその店の前に臨時の台を出し、それにあらゆる種類の古本の教科書を堆高く積んで、番頭や小僧たちが立ち並び、

「はい、いらつしやい。簡野さんの漢文？　へい」

と年に一度の活況に、浮きうきとうかれたやうな応待振りであつた。

私はこのやうに教科書に古本のあることを知らず、はじめは普通に、三省堂で新しい教科書を購入しようと神田へ行つたのだが、行つて見て、さういふ古本屋の存在を知り、新本を買ひ揃へられる金は母親から貰つて持つてゐたけれど、少しでも安い古本を買つて母親の負担を軽くしようと思ひ立つたのだつた。まことにいぢらしい心根といふべきだが、それは古本屋の存在を知らされたためといふより実際は、古本屋の前に群を成して詰めかけてゐる中学生の存在が私にさういふ勇気を与へたのである。(1)さういふ群が私を刺激し私を支へるといふことがなかつたら、私はさういふ「親孝行」を行ふことはできなかつたに違ひない。さういふ群のなかには、府立の生徒は、殆んどといつていい位見かけなかつた。府立はその頃、五中までしかなかつた。

私は古本を買つたことによつて何か大変いいことをしたやうな喜びを味はつたものであつたが、いざ授業となると、前後左

右、いづれも真新しい、丁度仕立おろしの着物のやうなぱりッとした本を開いてゐるなかで、私のだけが丁度よれよれの着物のやうな汚ならしい、持つとぐにやりとなる本なのに、――さあ、何んともいへない屈辱の想ひに襲はれた。ちよつとの金の違ひで、やつぱり軽率だつたと後悔され、自分のしみつたれた貧乏人根性がいまいましかつた。

「兄貴のお古なんだよ。いやになつちやう。……」

さういふいつはりの弁解を逸早く狡猾にも用意したが、心は穏かでなかつた。裏表紙に、どこの誰とも分らない前の持主の名前が書いてあるのを、墨で丹念に黒々と消したけれど、(2)その黒い跡はまるで犯罪の痕跡のやうに私をおびやかしてやまなかつた。

まことに、羞恥といふより虚栄心であつた。ひとたび、古本を買はうといふ勇気を持ち、買つたことによつて、(3)吝嗇の喜びでない一種美しい喜びを持つた以上、何故その勇気と喜びとを貫き通さうとしなかつたのか。貫き通すことができなかつたのか。――この弱さ、この種の怯懦は、思へば、私のいままでの生涯に常に色々な場合と色々な現はれに於て、つきまとつてゐた。

「角間。教科書に書き入れをしてはいかん」

ある日、私たちの机の間を見廻つてゐた教師が、私の漢文教科書にふと目をとめて、言葉鋭く私を咎めた。

それは、私のでなく、古本の前の持ち主の書き入れであつたが、前の持ち主はよほど(4)熱心な劣等生と見え、下らない書き入れがびつしりとしてあるのは、汚ならしいとともに腹立たしく、私自身「いかんぢやないか」と私の知らない前の持ち主に毎度、怒つてゐたところだつた。

桃李不レ言下自成レ蹊――この桃李に「トウリ」とインキで仮名が振つてある。いかにも私が劣等生で桃李が読めないかのやうで情けなかつた。責レ善朋友之道也、――責ムルに「ススムル」と仮名がつけてあり、それで、その仮名が眼に入つて、「責」をさう読ますのだと覚えるのに邪魔であつた。

「これ、僕ぢやないんです」
私は顔から火の出る想ひだつた。
「お前が書いたんぢやない？」
「ええ」
「なんだと」
教師は荒々しく本を取り上げ、ぱらぱらと頁を繰り、そして古本とさとると、険しい表情を変な困惑のそれに変へて、
「ふん。消さんといかんな。消さんと……」
インキで書いたのをどう消したらいいか。勿論私は聞きはしなかつたが、教師もその点、何も言はず、そそくさと去つて行つた。(5)叱責を悔いてゐるやうなその後姿は、叱責よりも強く私を悲しませた。

（高見順「わが胸の底のここには」より。一部省略）

問一　傍線部(1)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)について、「犯罪の痕跡」のように思えたのはどうしてか、説明せよ。

問三　傍線部(3)「吝嗇の喜びでない一種美しい喜び」とはどのような喜びか、説明せよ。

問四　傍線部(4)の「熱心な劣等生」とはどのような意味か、説明せよ。

問五　傍線部(5)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

白

紙

三

次の文は、江戸幕府五代将軍徳川綱吉の側用人柳沢吉保に仕えた正親町町子（おおぎまちまちこ）の日記の一節である。宝永二年（一七〇五）三月勅使が到着し、綱吉を右大臣とする宣旨が伝えられた。柳沢吉保は、この慶事のすべてを取りしきった。ここに掲げた文には、それに続く吉保の日々の様子が記されている。これを読んで後の問に答えよ。（五〇点）

かく、こなたかなた、御よろこびをのみいひつづくるほど、れいよりも御いとまなし。おまへちかき花は、今さかりにて、春ふかきよもの梢おもひやられて、しらぬ山路だにとはまほしきに、ましてか*の山里の花はいかにいかにと、たえず心もとながり給ふ。かしこより一えだ、ふたえだ折りて奉れたるに、「あはれ、れいよりもめでたく咲きにたりや。ことしは、かくのみことしげくて、ゆきてみむも難（かた）かんなるを、いかがはせん。(1)あやにくにも咲き出たる色ごさかな。まして、このもとはいかに」などのたまふ。

いかで、さらむいとままち出てなどは、猶おぼす事たえず、夜（よ）の間（ま）のかぜもこころもとなきほど、にはかに嵐いとあらく吹きたる夕などは、ましてしづ心なく、(2)おほふばかりの袖もえ得まじう、わりなき事となげかせ給ふ。

日かずもすぎぬ。おまへの桜、やうやううつろひゆくに、かぞふれば(3)春のかぎりにもなりにけり。「山*には春も、とおもへど、くちをしきにては、なほえやむまじう」などのたまひて、御いとまこしらへいでて、けふぞ山ざとに入らせ給ふ。おもひしよりは猶さかりにて、今ぞ御心おちゐぬ。れいの山水のをかしきところどころ、日ぐらしめぐらひありき給ふ。大かたのこずゑは、(4)さいへど、やうやううつろひがちにて、ともすればつらきかぜの、こころにまかせてちり行くめるを、(5)かしこうもきたりけりとおぼしなりぬべし。口ずさびに、

(6)まだちらぬ花しありともけふみずはあすやなごりもなつのこのもと

（『松蔭日記』より）

注(*)

かの山里＝駒込にあった吉保の山荘。

山には春も＝清原深養父の歌「花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり」(古今和歌集)を踏まえた表現。

問一　傍線部(1)を、状況がわかるようにことばを補って、現代語訳せよ。

問二　傍線部(2)は、『後撰和歌集』の歌「大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ」を踏まえている。その点に注意しながら、傍線部(2)を現代語訳せよ。

問三　傍線部(3)の意味を記せ。

問四　傍線部(4)について、「さ」の指示する内容がわかるように、意味を記せ。

問五　傍線部(5)で、筆者は誰のどのような気持ちを述べようとしているのか、文脈に沿って説明せよ。

問六　傍線部(6)の和歌を、掛詞が使われていることに留意して、現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。